

2013年12月19日

神奈川県知事 黒岩祐治 殿

一般社団法人 日本建築学会
会長 吉野 博

神奈川県立近代美術館の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚くお礼申し上げます。

さて、今般、新聞記事等の報道により、借地権期限の満了にともなう鶴岡八幡宮への土地の返還により、神奈川県立近代美術館の存続が危ぶまれているとのこと聞き及んでおります。

ご承知のように、神奈川県立近代美術館は日本を代表する建築家であった坂倉準三の設計によって1951（昭和26）年に完成し、戦後日本のモダニズム建築を代表するきわめて重要な建物として広く知られています。本会では、モダニズム建築の世界的な保存顕彰団体である DOCOMOMO International（モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査および保存のための国際組織）の活動の一翼を担うべく、1999年に建築歴史・意匠委員会内に DOCOMOMO 対応ワーキンググループを設置し、以降 DOCOMOMO Japan（DOCOMOMO 日本支部）と連携して日本における保存・再生を進めるべきモダニズム建築を順次選定してきましたが、神奈川県立近代美術館はその最初の20選の一つとして選ばれ、この建築に対する評価は国内のみならず広く海外へも伝えられています。

神奈川県立近代美術館は鶴岡八幡宮の敷地の一角を占め、市民の心のよりどころとして長い間愛されつづけ、また境内の風景の一部となってきました。前面に広がる池に1階テラスが大きく張り出してこの建築に親水性を与え、建築と自然が一体化した魅力的な空間をつくり出しています。さらに、この建物で試みられた建築的方法は、西欧で生まれたモダニズム建築と日本古来からの伝統的建築のあり方を融合させた独自のもので、戦後日本におけるモダニズム建築の白眉ともいえる存在です。

なによりも、神奈川県立近代美術館は日本ではじめての公立近代美術館であり、その建設の経緯に込められた当時の人々の思いを尊重し、今後の計画立案におかれましてはこの建物の建築的、景観的、歴史的価値に十分ご配慮いただけますよう、ご理解を賜りたく存じます。

貴下におかれましては、この貴重な建物の有する高い文化的意義と歴史的価値について改めてご確認いただき、このかけがえのない文化遺産が永く後世に継承されますよう、格別のご配慮を賜りたく、重ねてお願い申し上げます。

なお、本会はこの建築の保存活用に関して、学術的観点からのご相談をお受けいたします。

敬具

2013年12月19日

神奈川県立近代美術館についての見解

一般社団法人 日本建築学会
建築歴史・意匠委員会
委員長 杉本俊多

1) 建物の概要

神奈川県立近代美術館の設立の経緯は、戦後初の公選知事・内山岩太郎が「民主主義を推進するためには人々が集う場がなければならない。多くの人々が集うところから新しい時代が始まる」という理念のもと、1949（昭和24）年に県下の美術家、学者、評論家たちによる美術家懇話会を組織したところから始まる。翌1950（昭和25）年2月には建設費2,850万円の予算が可決され、委員の一人であった建築家・吉田五十八を審査委員長として、5月12日から6月24日にかけて、坂倉準三、谷口吉郎、前川國男、山下寿郎、吉村順三の5人による指名コンペが行われ、翌25日には坂倉準三案を採用と決定した。その後、10月下旬に実施設計を完了、暮れに着工し、翌1951（昭和26）年11月に竣工した。

創建当初の建物の概要は以下の通りである。敷地は鶴岡八幡宮の一角、林に囲まれた平家池の畔であり、構造は鉄骨造2階建て一部中2階付きで、建築面積は1階593.7㎡（うちピロティ廻り230㎡）、2階978.1㎡（うち中2階31㎡）、計1,571.8㎡、中庭141㎡である（『新建築』1952年1月号記載による）。外装は、1階は大谷石積、2階は成形板ボードとアルミニウムの目地金物、壁面の上下にアルミの波形及び押縁を廻し、材料素地のままに仕上げる。屋根は亜鉛メッキ板の瓦棒葺で一部トップライトがついた。1966（昭和41）年、同じく坂倉準三建築研究所により新館が増築され、1968（昭和43）年、本館の屋根・外壁・内部仕上、設備の改修工事を行った。この際、展示室には天井を張り、トップライトを廃止し人工照明とするとともに、建物上辺に若干厚みを加えるプロポーションの変更が行われているが、この改修工事は坂倉準三の存命中に行われたものであり、坂倉本人の承認を得たものである。

資料としては、『国際建築』1950年12月号に設計図・実施案、および坂倉自身による設計主旨が掲載されているほか、竣工時の『建築文化』1951年12月号、『新建築』1952年1月号、『建築文化』1963年6月号への坂倉自身の寄稿文がある。また、坂倉没後に所員や研究者によって書かれた論文、展覧会のカタログ、建築案内の書籍・雑誌記事など数多くの資料がある。

2) 歴史的価値

①近代のかつ周囲の環境と豊かに呼応した空間・意匠計画の価値

本建築はまず、敷地に対しては、鶴岡八幡宮の敷地の一角に建つことに配慮して、あえて参

道側ではなく外苑側にメインのアプローチをとっている。その細いアプローチはやがて西側の開放的な大階段に迎えられる。この開口部に向けられた屋根は2寸の緩やかな勾配をとっており、建物中心へと向かうパースペクティブが強調されている。

2階は主に絵画展示が想定されており、ロの字型の1方向回遊型平面とし、明快な動線計画となっているが、特別展示室に入る前には南側の池に面したテラスおよび喫茶室を設け、鑑賞者にひと時の休息を与える人間的な側面も併せ持っている。

一方、テラスから階段を降りた1階は主に彫刻展示を想定している。自然光のもとで自由な角度から鑑賞することを可能とするため、中庭には屋根をかけず、東西南北の各方面へと視線・動線が流動的に拡散してゆく平面計画となっている。

1階南側の池に面したピロティは、2階床が大きく池に迫り出しており、池への親水性を高めるとともに、天井には池の水面が反映する趣向となっており、建築と自然が一体化した魅力的な半屋外空間を実現している。

展示施設として合理的かつ明快な動線計画に基づく空間構成を取ると同時に、内外空間を流動的に結びつけ、近代的でありながら、日本古来の美意識をも感じさせる空間が一つの有機体として実現されている点は本建築においてとくに秀逸なところである。

②展示施設建築の系譜における価値

坂倉は、1937（昭和12）年に手がけたパリ万国博日本館において、1. プラン平面構成の明快、2. 構造の明快、3. 建築構成要素（構造材）の自然美の尊重、4. 建築と建築を囲む自然（環境）との調和、の4点を特徴としているが、これらはすべて過去の優れた日本建築の特徴として挙げられると述べている。そして、これらの4点はいずれも、同じ展示施設建築である神奈川県立近代美術館にも受け継がれているものである。

さらに、神奈川県立近代美術館では、1939（昭和14）年に坂倉の師ル・コルビュジエが提唱した「無限成長の美術館構想」を踏襲し、設計競技時には展示室の東西に展示スペースやオーディトリウムを増設する計画を書き入れている。ル・コルビュジエ自身は「無限成長の美術館構想」をこの後、国立西洋美術館において初めて実現することになるが、前川國男、吉阪隆正とともに担当した同建築の実設計では、パリ万国博日本館および神奈川県立近代美術館という2つの実作を持つ坂倉が建築図面を担当し、師の構想の実現に多大な貢献をしている。

神奈川県立近代美術館は、今はなき坂倉のデビュー作であるパリ万国博日本館の資質を受け継ぐ作品であり、かつ、その後1939（昭和14）年に発表されたル・コルビュジエの「無限成長の美術館構想」を取り込む試みをしつつ、国立西洋美術館におけるその構想の実現に寄与した極めて重要な作品だといえる。

③技術史上の価値

近代的な工業製品である成形板ボードをアルミ・ジョイナーにて乾式で取り付けした外壁、細い鉄材を鋸留めで組み合わせたトラス構造による屋根、波板鉄板を型枠兼鉄筋代わりとした無

筋コンクリートの2階床など、積極的に近代的素材と技術を使うことで、軽量化をはかりながら、耐震、耐火、経済性にすぐれた構造計画としている。一方で、1階外壁には日本固有の建築材料である大谷石を使用し、伝統と近代の調和も試みられている。そして、これらの素材を極力素地のまま、簡潔かつ清潔な納まりで使用し、軽快かつ清新な建築を実現している点は秀逸である。

④公立近代美術館の嚆矢としての価値

神奈川県立近代美術館は日本における最初の公立近代美術館である。『国際建築』1950年12月号に掲載された設計主旨で坂倉は「美術館の機能」として「新しい美術館はモニュマンタールな従来の美術館とは違った、人々に親しまれるもっと社会性の多い有機的な機能を持つ」と述べている。戦後民主主義を推進し、内外のさまざまな交流センターとなることを企図して実現された日本初の公立近代美術館として神奈川県立近代美術館は極めて重要である。

なお、本建築は、DOCOMOMO（Documentation and Conservation of buildings, sites and neighbourhoods of the Modern Movement、モダン・ムーブメントにかかわる建物と環境形成の記録調査及び保存のための国際組織）日本支部による「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」20選にも選定されており、国際的な評価も高い。周囲と一体化した優れた建築の空間・意匠計画が行われ、美術館という展示施設建築のビルディング・タイプ発展の歴史の中での重要性を有し、近代的な素材と技術を使いながら、日本の伝統にも配慮し、戦後民主主義を体現するべく建設された本建築は、極めて価値の高い建築である。



(撮影：田所辰之助)